



ジャパン・スポットライト 日本のキーパーソン 独占インタビュー

(インタビュアー：原岡直幸)

2026 年 6 月 4 日インタビュー実施

Japan SPOTLIGHT 2026 年 9/10 月号に英文記事掲載

(URL: https://www.jef.or.jp/journal/pdf/269th_Exclusive_Interview.pdf)

【日本語版】

「障がいのある子供たちの健康支援から、お互いが分かち合える 社会の実現へ」

2026 年 9/10 月号のリーダーズ・インタビューは、ケニアで障がいのある子供たちへの医療・健康支援に 10 年以上取り組まれて来た、小児科医の公文和子先生です。先生は、2002 年からケニアにいられて、2015 年より、障がいのある児童の療育事業を、首都ナイロビ郊外で行う、「シロアムの園」という、現地 NGO を運営されておられます。

シロアムとは、新約聖書で、イエス・キリストが盲人を癒した場所として知られる池の名前です。

はじめに

原岡 先生が創立された「シロアムの園」いう名前の由来ですが、聖書の「ヨハネによる福音書」のお話から取られたと伺っております。

このお話によると、障がいのある状態で生まれたことについて、イエス・キリストが、その人やその親の罪が原因ではなく、神のわざがそこに現れるためであると説明されたそうですけれども、その意味について伺わせていただければと思うのですが、いかがでしょうか。

公文 私たちは、すべての事象の原因が何かを突き止めようとすることから始めることが

多いと思います。私も同様に、例えば患者さんの症状の原因は何なのかを考えることは非常に重要で、それによって様々なことが予防できることも多くあります。

ですけれども、そこにフォーカスが行き過ぎると、過去のことに焦点が当たり過ぎて、将来のことに目が行かなくなります。

ここでキリストがおっしゃったのは、障がいが誰かのせいで起こるということではなく、神様がご計画なさっていることのひとつではあるし、そこから読み取れることとして原因を分析することも一つだけれど、これからの将来に対してどうすべきかということを考えていくことが、重要だということだと思います。

例えば、私は明日、子どもを亡くした親御さんたちと会うのですが、その時に「あの時、ああしていなければ亡くならなかったのかな」とか、そういうことはいろいろとあると思うのですが、子どもが亡くなった人生の中で、どういう人生が用意されているのか、その中で、神の意志がどのように働くかということを見る方がもっと重要になってくる、そのことを神様はお示しになったのではないかとこのように思っています。

原岡 ポジティブなお考えということですね。

障がいというのも一つの人間の特色であって、それがいいとか悪いとかという考え方を持つことは適切ではないというようにも思えますが。

公文 障がいそのものより、それによって起こっている困難に目を向けることのほうが重要です。見えなくてもそのことが気にならない人もいるし、すごく不便な人もいるわけですね。

障がいを一つの特性ですという言い方をするのですが、私はそれが必ずしも適切ではないと思います。例えば歩けないことはもちろん非常に不便で、差別の対象になったりすることもあるし、社会参加ができなくなったりとかありますが、そこは社会が変わって、その人が歩けなくてもできることを増やしていくとか、歩けない中でどう生きていくかを示すことができるようにすることが大事です。

障がいがどのように生きることの影響しているのかと見るのが社会モデルであり、その社会モデルをどう変えていくかが重要です。

「シロアムの園」立ち上げの動機、その活動内容

原岡 2015年に施設を立ち上げて活動されてこられて、もう11年になられるわけですが、立ち上げられた動機や活動の内容について、簡単にご説明いただければと思います。

公文 まず一つは、私はもともとクリスチャンで、クリスチャンとして、どのように生きていくのかということが、大きな課題でした。多くの人が考えるように、人のためになることをしたいという思いから、海外に出て、医療の仕事に携わって参りました。しかし、それは簡単なことではなくて、まず一つは自分が人のためになっていると思っていることは必ずしも人のためになっているわけではなかったりとか、広い視野からヘルスケアに従

事することもしばらくやってきたのですが、そうすると、細部に目を向けることが難しくなってくることで、やっていること自体の意味が失われていったりとか、そのような経験を10年近くして参りました。

2000年に日本を出て、ケニアには2002年からおりますが、そこで、JICAの医療支援の仕事などをやりながら、自分の中で漠然と、人のために何かをしたいではなくて、誰のために、誰と一緒に生きていくのかということがすごく重要だと考えるようになりました。そのような時に、障がいのある子どもたちと出会いました。

それまで私はエイズの治療や母子保健の仕事をしてきたのですが、ケニアの社会で障がいのある子供の問題は、非常に解決のつきづらい問題だということを思いました。

それは制度の問題や、障がいのある人への差別の問題だとか、またそれぞれの障がいの特性があまりにも違うということです。もちろん母子保健とかエイズといっても個々の生活は違うのですが、さらにその中でも障がいの場合は、例えば歩けない人と知的障がいの人とでは、同じ障がいのある人と言っても非常に異なった生活を送っています。そういう中で、一生懸命生きている子どもたちと出会って、私はこの子たちと歩みたいと思ったのがきっかけです。

医者という立場から、ヘルスケアが切り口になっていろいろなことを進めてきたのですが、子どもたちと友達になった時に、これはヘルスだけでなく、子どもたちのご家族の持っている問題なども含めて、みんなで一緒に考えていくようなものをつくっていきたいと思い、立ち上げたのがシロアムの園です。

子供たちが笑顔でいられるためには何が必要なのかと考えたときに、最初、リハビリや医療の提供はすごく重要だと思いましたが、同時に、学校に行けないということも考えなければなりません。

学校に行けないのであれば、社会参加をどのようにすべきか、あるいは、子どもたちが笑顔でいられるためにはご家族の幸せも大きなファクターになってきて、ではご家族の幸せをどのように見ていくのかも重要です。障がいがあるから、家庭崩壊が起こったり、障がいがあるから貧困が進んだりとかという状況の中で、その原因は、社会保障制度がないからとか、福祉サービスがないからお母さんたちが働きに行けなくてとか、シングルマザーのお母さんが働きに行って、おばあちゃんが一人で育てることになり、それでは、おばあちゃんをどう支えていけばいいかという問題が生じます。

そのために、お子さんがどのように成長していくことができるのかを一緒に考えていく中で、家族支援や、ご家族の収入向上プログラムを行っています。

また、私どもは、入所施設ではなくて通園です。これはすごく重要で、子どもたちがご家庭で育って、地域の中において、そこから通園してきて、その地域に帰っていくことによって地域が変わっていくということもあります。

その子がいることによって地域が変わっていくということをどうやって達成していくのか、制度がないから制度を作るようにどう働きかけていくのかとか、という社会に向けて働きかけていくこともあります。全人的ケア、包括的ケアということで子どもたちに必要な教育、リハビリ、医療、心理的なサポートなどのダイレクトサービスデリバリーの提供

を行っています、それに加えて、ご家族や、地域の支援活動も行っています。

原岡 単に医師として病気のお子さんを見ておられるだけではなくて、地域とか家族のつながりを重視して、それら全体の福祉を考えておられるということですね。

公文 そうです。健康は一つの大きなファクターですから、そこは一つ重要な部分ではあるのですが、健康であれば幸せというわけではないですね。

ケニアへの支援の変化、多様性の高まり

原岡 日本では、アフリカについて学ぶ方はまだ非常に少なく、ASEAN などは、日本と非常に関わりが深いので、ASEAN の国と日本との関係を、グローバルな視点から、どのように発展させていったらよいかということの問題意識として持っておられる有識者がいらっしゃるのですが、アフリカについては、そういう方はなかなかいらっしゃらないようです。

今おっしゃったような福祉に貢献する活動は、アフリカとの関係を発展させるのに、大変貴重なものだと思うのですが、日本人、非日本人を問わず、先生のようなご活動をされている方は多いのでしょうか。

公文 アフリカは、植民地としての歴史が長いので、旧宗主国の影響が強いです。

しかし、最近では、それもすごく変わってきているところもあります。

私が 2002 年にケニアに行った時には、ケニアは建国が 1963 年ですからちょうど建国後、40 年ぐらいしか経過しておらず、宗主国であるイギリスの影響が非常に大きいということをその時には感じました。

ただ、それから更に 25 年ぐらい経過した今、イギリスとの関係とは全く違うものが入ってきています。特に私はエイズ対策に携わっていたのですが、エイズに関しては、アメリカが、おせっかいなほど関係してきています。それが大きく貢献したということはありません。但し、根本の部分にはイギリスが押さえて地盤を作っていた部分も大きかったと思います。

また、現在は、中国が、非常に大きな影響を持っています。日本の援助と比べて、中国のお金の出し方は規模が違います。

そういう意味では、最初の宗主国の影響の中で外国からの支援が始まってきたところから比べて、中国が入ってきて、ダイバーシティが非常に大きくなったのではないかと私は感じています。

私が 2002 年に初めて入った時は、就労ビザの取得も難しくなかったし、医療的なライセンスを取るのも全く難しくなかったし、来る人は拒まずという感じで、支援してくれる人はみんな支援してくださいという感じだったのでいろいろな人が入ってきたのですが、ここ数年、就労ビザは取得が難しくなっていて、外国人は雇用機会を奪う人たちなので入ってきてほしくないというようなことになっています。

医者のライセンスに関しても同じだと思います。

また、今、入国される日本人も、ソーシャルビジネスという形で入ってこられるようになってきて、現地との Win-Win の関係という言葉が多く使われるようになってきています。

特にケニアの場合は住民の多国籍化が進んでいます。ナイロビに国連があって、そこにある程度のビジネスの基盤があって、福祉には届かないけれども、外国人が来ても楽しめる国というところで、ビジネスチャンスもあると思われる方たちも非常に多く、いろいろな人たちが小さなビジネス、ソーシャルビジネスなどで入っていらっしゃいます。

大手の金融機関とかも入っていらっしゃいますし、私も豊田通商と交流させていただいていますけれども、彼らも「WITH AFRICA FOR AFRICA」というスローガンを掲げて、大きな仕事をなさっています。

そういう意味では、最初は支援という形で入ってきた人たちが多かったのが、今は支援の人たちもまだいますけれども、必ずしもそうではなくなっているというのを、感じる場所です。

原岡 ケニアはアフリカの中でも先進国ということで、ビジネスチャンスの国という位置付けなのでしょうね。

公文 そうですね。ただ見てみると、なかなかうまくいっていないです。うまくいく人たちもいるんですけども、文化の違いもあり、アフリカの先進国ではあるけれどもギャップが大きい。進んでいるところは進んでいますけれども、遅れているところは遅れているというところで難しいというふうに感じています。

制度の欠如による資金集めの困難

原岡 いろいろご苦労されたことも 11 年間で、あると思います。経済面も技術面もあると思いますし、さっきおっしゃられたアフリカの文化の問題、障がいのある人への差別の問題もあると思いますが、そのような課題とどのように向き合って取り組んでこられたか、ご紹介いただければありがたいです。

公文 その質問をよく受けるのですが、あまりよく分からないところがあります。一つはアフリカだから難しいのか、日本で普通に働いていても難しいことは、いっぱいあります。それは日本だから難しいのか、個人だから難しいのか、この会社だから難しいのか分かりづらい部分があります。

私は、例えば時間に対するコンセプトの違いだとか、インフラが整わないからとか、いろいろなところでアフリカだから困難というところはあるとは思っていますが、私が非常に困難に思っている部分、例えば人間関係だとかは必ずしもアフリカからではなくて、普通に皆さんが働いているところで起こっている問題と同じような、内部の人間関係とか組織のつくり方とか、そういうような部分なのかもしれないというように思うところがあります。

例えば、部署同士の摩擦が大きくなって大変だった時期がありますし、選挙の前に部族同士がぶつかるというようなことは確かにありますが、そうではなくて、実際にはお互いをリスペクトするカルチャーについて、それはアフリカだからないという話ではなくて、それぞれの部署の人たちがみんな一生懸命やろうとしているあまりに相手を見られなくなっているところがあります。でもこれは日本でも普通に起こる話です。

ただ、シロアムの園として一番難しいのは資金面なのですが、なぜ資金面が難しいかというと制度がないからです。日本で福祉ビジネスがあるのは、大いに儲けられる人たちもいるかもしれないけれど、それ程儲けなくても十分生き延びられるための制度があるからです。何人以上の従業員、何人以上の利用者がいればこれだけの助成金が入ってくるとか、利用される方たちのための障害者年金があって、そこからの支払いがあるとか、そのようなものがあるところでやるのと、それが一切ないところでやるのとの違いがたぶん一番大きいです。

私の仕事の分量として一番大きいのは資金集めなのでそこを一番大きく大きく感じます。文化面は意外と、私も四半世紀、住んでいるので、順応しております。

原岡 資金集めのための新しい制度を作らなければいけないとなると、福祉の問題だけではなくて、経済制度の問題とか政治の問題とかになってきて、直そうと思ったら相当大掛かりで働きかけないといけないことになりますね。

公文 そうですね。例えば障がいのある児童に対する学費支援制度があるのですが、枠が少な過ぎて多くの人たちが支援をもらえない。私たちでも、行政にレターを持って行って「シロアムの園に通っているお子さんたちだったら支援を出します」といって出してくれるようになったのです。

但し、行政の人たちのモチベーションが、それを認めることで、次の自分たちの選挙の票が取れるなどです。制度としてそれができているというよりは、政治家が、票のために道を造ったり、学費支援をしたりしているのです。賄賂なども、根強く、それを根本的に変えるのが難しいです。

私たちの施設の子どもたちが幸せになるために取ってくるお金は取ってきて、社会に知ってもらふことによってまた少しずつ変わってくることはあるのではないかと、ということで小さな努力を積み重ねています。

現在の日本の問題、高齢化、医療制度について

原岡 日本の高齢化社会では、高齢者が心身両面で幸せになるには、ボランティア活動など、金銭的報酬よりも多くの人に感謝される仕事ができることだと言われています。

健康長寿を保つ秘訣は生きがいではないか、日本の高齢者が生きがいを求めて海外で働くということも一つの生き方かと思うのですが、それについてどのようにお考えでしょうか。

また、日本の医師の方も、最近は病院の経営が、財政難の問題から報酬が十分でないため、医師を辞めて医療コンサルタントに転身してしまう方が増えているというお話もあり

ます。

そのような医師の方々が、グローバルサウスに行って働くほうが生きがいも感じられていいのかとも思うのですが、いかがでしょうか。

公文 まず一点目の質問ですが、私たちの事業の根本的な哲学は、高齢者とか障がいのある人とかに限らず、私たちはお互い与え合う関係だということです。生きがいというと、それはどこまでも自分中心なのですが、社会という観点で見たときに、すべてのものがインタラクションの中でうまく働くと思っています。

私どものスタッフが私どもの施設の子どもたちの汚物を処理し、よだれを毎日浴びながら仕事ができていること自体、もちろん給料をもらうことはすごく大きなモチベーションではありますが、なぜそれをしているかという、やはり子どもたちから受けているものがあまりにも大きいからだと思います。

子どもたちの持っている本当にすばらしいものと出会うことができるからです。座敷牢の中でずっと成長してきている子たちが多いのですが、その環境では、その子が本来持っている本当にすばらしいものを人に与えることができない。人に与えることによって、その子本来のものが出てくるのだと思います。

人との関わりがあるところに必ず成長があり、その成長は個人の成長でもあり、社会の成長でもあると思います。

私は生きがいが欲しいから人のために何かをするというのは、一方通行だと思います。子どもたちは、施設のスタッフがうれしそうに働いているから、その人たちと一緒に生きていくことがとてもうれしいと思うし、そうやってうれしい子を見ているからこそ、自分たちがただ生きがいというだけではなくて、幸せだと思える、その相互作用がどんどん膨らんでいくと思うのです。

何をバリューに置く社会なのかというところが非常に重要で、個人の達成だけを見ている社会は絶対、私は成長しないと思います。

もちろん高齢者が海外に、JICA の協力隊のシニアボランティアで行くのもいいとは思いますが、自らの周囲で、とても助けを必要としている人たちに目が行かず、自分の生きがいだけを探しているうちは、どこに行ってもたぶん生きがいが見つからなかったりすることもあると思います。そこに目が向けられるようになるのはすごく重要なことだと思います。

医療制度については、どのモデルがいいのかというのは非常に難しく、結局社会的な価値観によると思います。イギリスなども、原則無料で医療を受信できる国民保健サービスは、診療所が恒常的な混雑状態で、専門的な治療を受けるのが非常に難しくなって、崩壊しそうになっています。誰もが医療サービスを受けられるようになるということを前面に出すあまり、誰もが受けられなくなってしまっているというようなことも起こっています。

逆にアメリカのように、富裕層は、高い治療費を払って高度の医療サービスを受けられる一方、貧困層が医療を受けられないという場合もあります。私は、医者も給料をもらっ

ているのであれば、問題は、仕事に喜びを感じられることをやっているかどうかということではないかという気がします。

医療保険の問題とか医療制度の問題というのは答えのないもので、今、ケニアも、国民皆保険に向けて動き始めています。

制度は、国民全員が作っていくものですから、大切にできる価値があるかどうかで、どのようなものになるかが決まってくると思います。アメリカのように個人の自由を重視する国では、取り残される人たちが非常に多くなってくるし、そうではなくてみんなが幸せな社会をつくりたいのか。そこに医療制度というのは関係していると思います。

今後の抱負

原岡 最後に、差し支えなければ今後のお仕事をされる上での抱負を伺わせていただければと思いますがいかがでしょうか。

公文 人生の後半に入っておりますので、生きている間に、目標をどこまで達成できるかというのは大きな課題として持っています。

最初の 10 年はスタッフが子どもたちにしっかりと向かい合って、子供たちのニーズを充足する人間に、スタッフを育てるということに留意して、努力してきたと思います。そのために必要な技術、例えばリハビリに必要な技術とか医療に必要な技術あるいはそれを教える教員など、外から大いに導入して育ててきたつもりです。その結果、障がいのある子供たちに向き合える人材が育成されてきたと思います。その人たちが、シロアムの園の中の子どもたちと幸せになるだけではなくて、どのように社会に影響を及ぼしていくのかということについて、貢献できることがあると思っています。そのように、次の 10 年を持っていくということが非常に大きな課題だと思います。

今、非常に待機者が多いです。200 人以上待機していて、結局待機していてそのまま亡くなってしまう子どもたちも多いので、施設の中だけを見ては不十分で、どのように外とつながって、外の社会に目を向けていける組織にしていくかというところが大きいと思っています。

原岡 組織を大きくするというと同時に、あるいは同じような施設をもっとつくっていくということですね。

公文 そうですね。今のままで大きくしたら破産しますから、大きくしてはいけません。他にどのような施設をつくっていくか、他の人たちがやりたいと思っていることをどのようにサポートしていくのか、そのような仕事も大きいと思います。

原岡 お忙しいところ、長い時間、有益なお話を伺わせていただき、ありがとうございます。

(了)